日刊 動労千葉
83. 8. 22
No. 1423

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

臨調・行革粉砕！　三里塚ジェット闘争勝利！

「反合闘争は国鉄労働運動の終えんを意味する」なる反階級的「現状認識」

動労第39回全国大会方針を弾劾する

「日刊動労千葉」は、三回にわたり動労「本部」第39回大会方針の反動性について暴露し弾劾してきました。

すなわち、「いまは冬の時代であり情勢が厳しいから職場と仕事を守るために働き度を高め合理化に協力すべきであり、闘おうなどという奴は挑発者だから粉砕する」という反階級的路線であることを明らかにしてきました。

それでは最後に、こうした方針を規定せしめる「情勢分析」「運動の基調」についてみていこうではありませんか。

"減量経営下の反合闘争はだめ"

「運動の基調」の冒頭、動労「本部」革マルが第二臨調第四部会の発足をもって、いち早く「職場と仕事を守る＝働こう運動」による逃亡を開始したことをあけすけに語っています。

そして、こうした路線をとるにいたった「現状認識」の第一として、「国鉄の旅客・貨物輸送が大幅に減少するなかでの減量経営にたいするたたかい」であるとし、「仕事があり職場があってこそ国鉄労働者として生活ができる」のであり、減量経営のもとでは「かつての反合闘争の延長線上でたたかうならば、その道は国鉄労働運動の終えんをも意味する」と述べています。

すなわち、「減量経営のもとで反合闘争を闘えば、国鉄はつぶれ職場も仕事もなくなってしまう。だから反合闘争は国鉄労働運動の終えんをも意味するのでやらない。働こう＝合理化に協力しよう」ということなのです。

これこそ労使正常化・生産性向上という当局方針に対し、「働け」「効率アップ」で応える屈服の思想であり、労働者の立場ではありません。

「動労型労働運動」の破産を自己暴露

「職場と仕事を守る＝働こう運動」を基本路線とした「現状認識」の第二は、「労働運動総体が右傾化し、混迷と停滞を繰り返すなかでのたたかい」であるとし、「動労が従来のようにたたかえない」理由として「革新政党・労働運動が後退し危機的事態をみせているから」であり、「主体的な動労の組織的力量のみならず反対運動総体の力量を無視して解決することが困難」と述べています。

動労「本部」革マルは、例によって闘わない責任を総評や国労など他者になすりつけていますが、「動労型労働運動」なるもののみじめな破産を自己暴露しているではありませんか。とりわけ国労について、「昨年のブルトレ以降……組織は分断され国鉄当局からの組合員に対する強権的な不当処分のみ結果し……完全なる破産を突きつけられています」ということの中に、革マル式・処分＝おわり論をみることができます。

支配階級に屈服する奴隷の思想

「職場と仕事を守る＝働こう運動」を基本路線とした「現状認識」の第三は、「国家意志に基づく直接的な攻撃にたいするたたかい」であるとし、「戦後政治の総決算」「軍事大国化路線の抑圧下」「支配の安定」などと支配階級の攻撃を絶対化したうえで帝国主義への完全な屈服を表明しています。

すなわち、「八〇年代後半に日本の労働運動は存在するか」などと、敵の攻撃のまえにふるえあがり、「輸送量を増やせ」「働く場所を確保せよ」「減量経営には反対」という企業防衛・経営参加の路線にいきつくのです。

動労「本部」革マルを追放・一掃せよ

こうした「現状認識」の結論が、裏切りの満展開となることはあまりにも明白であります。

動労「本部」革マルは、こうした立場から「ブルトレ」をはじめすべての裏切りを「大胆かつ率直な対応」と認めたうえで、さらに「慎重かつ大胆な対応」で「昇給協定改悪」や「動乗勤改悪」「59・2ダイ改」を「もっと　うまく大胆に」裏切ると表明しているのです。そしてそのためには「対立や混乱は利益を守るために解決していく」と、国労、動労千葉解体を宣言しています。

すべての労働者のみなさん！

こうした反階級方針のもと、労働運動の産報化へ突き進む動労「本部」革マルの追放・一掃をいまこそ実現しようではありませんか。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！